

名品コレクション展Ⅲ

2026年1月9日（金）～3月8日（日）

名古屋市美術館のコレクション

エコール・ド・パリ

第一次世界大戦後、芸術の都パリには世界各地から夢を抱いた若い美術家たちが集まつてきました。

モディリアーニ、シャガール、スーチン、パスキン、キスリング、藤田嗣治、ヴァン・ドンゲン、ザツキン、ブランクーシなど、故郷を離れた異邦人たちは、貧しいながらも自由で活気に溢れた生活の中で、パリ生まれのユトリロ、ローランサンといった画家仲間との交友や新しい芸術が次々に登場するパリ画壇に刺激されながら、それぞれ独自の芸術を開花させました。

芸術の都パリに育まれた画家たちは、総称して「エコール・ド・パリ」と呼ばれています。身近な人々の姿や街角の風景を描いた彼らの作品には、キュビズムやシュルレアリズムといった同時代の前衛的な芸術とは違って、庶民生活への親密感が溢れるとともに、異邦人としての郷愁が漂っています。

「エコール・ド・パリ」の系譜につながる日本人画家としては、パリに生きパリを描き続けた荻須高徳をはじめとして、田中保、海老原喜之助、岡鹿之助などが活躍しました。

メキシコ・ルネサンス

20世紀初頭のメキシコ革命を背景として、マヤ、アステカといったインディオ文明の復興と新しいメキシコの建国精神を民衆に伝えるために創始されたメキシコ壁画運動は、アメリカ大陸において初めて登場した美術運動として「メキシコ・ルネサンス」とも呼ばれ、世界的に高く評価されています。

壁画運動の三大巨匠であるオロスコ、リベラ、シケイロスはイタリア・ルネサンスの壁画をはじめとして、ヨーロッパの近代美術（表現主義、キュビズム、未来派など）に学びながら、メキシコ民族独自の造型を踏まえた現代の壁画を三者三様に創造しました。

彼らは1930年代のアメリカ合衆国において数多くの壁画制作を行って、「アメリカン・シーン」の画家たち（シャーン、スローンなど）をはじめとして、アメリカの現代美術の誕生に大きな影響を与えています。

三大巨匠の他にも、壁画運動以降の世代を代表する画家タマヨ、民衆版画家ポサダ、魅力的な女性画家カーロやイスキエルド、写真家ブラボーやモドッティなど、数多くの個性豊かな美術家たちが活躍しました。

北川民次もまた同時代のメキシコに滞在して、野外美術学校の運動に携わりながら、壁画運動から学んだ精神と画風によって、帰国後は日本画壇において「反骨の画家」として活動しました。

現代の美術

第二次世界大戦以降、急速に展開した現代美術は、既成の美術の枠組みを越えて、まったく新しい表現や造形、空間や概念を開拓してきました。パリからニューヨークへ中心地が移行して、国際化した美術界において、数多くの日本人作家が海外に進出して、創作的な活動を活発に展開しています。

名古屋文化圏もまた、荒川修作、桑山忠明、河原温といった国際的に評価の高い作家たちを輩出しました。彼らは、ある特定の概念を言葉や記号などによって提示する「コンセプチュアル・アート」や表現を極限まで切り詰めた「ミニマル・アート」などの現代美術の分野の代表作家として知られています。

1980年代以降になると、現代美術は新しい局面を迎え、その表現と内容がより豊かに多様化して、それぞれの作家の思想（芸術観）が作品のなかに明確に現れてきました。

新しい世紀の激動に翻弄されながら現在も、作家たちは私たちが生きている時代と世界を、過去から未来へと連続する時間の流れのなかで、あるいは生命と宇宙の連関のなかで、それぞれ独自の観点から鋭く探し、深く思索することによって、新しい美術を創造しようとしているのです。

郷土の美術

名古屋の近代美術は、明治後期頃から本格的に始まりました。東京に学んだ野崎華年と鈴木不知が洋画塾を開設して、後進の指導を始めるとともに、東京美術学校に学んだ加藤静児や太田三郎が文展に入選するようになって、1910年には、名古屋の洋画家・日本画家を結集した東海美術協会が創設されました。

大正期には、名古屋独自の洋画グループとして、岸田劉生の草土社に触発されて1917年に結成された愛美社（大澤鉢一郎、宮脇晴など）や関東大震災を契機に1923年に結成されたサンサシオン（松下春雄、鬼頭鍋三郎など）などが登場しました。

昭和期には、二科会の初期の会員となった熊谷守一や横井礼以、春陽会に参加した山本鼎、帝展の代表作家となった佐分真、独立美術協会に参加した伊藤廉や三岸好太郎、三岸節子などが東京画壇で活躍しました。1930年代の前衛美術の分野では、シュルレアリズム絵画・写真（北脇昇、下郷羊雄、山本悍右など）や抽象絵画（村井正誠、矢橋六郎、山田光春など）が活発な活動を展開しました。

日本画では文展の川合玉堂、院展の前田青邨をはじめ、地元では平岩三陽、渡辺幾春などが活躍しました。

エコール・ド・パリ フランスに学んだ画家たち

エコール・ド・パリの時代、多数の日本人画家たちがフランスに留学しました。正確な数は不明ですが、1920 年代には 200 名近い日本の美術家たちがパリにいたのではないかとも言われています。芸術の都で学んだ彼らの多くは、数年間の留学を終えて帰国するのが通例でした。また、1919 年頃からは、世界恐慌の影響を受けて帰国せざるをえなくなった者も多くいたようです。一方で、少ないながらも、藤田嗣治や荻須高徳のように、生涯にわたってフランスを拠点に活動した画家もいました。今期は、フランスに学んださまざまな画家たちが滞在中に制作した作品を中心に紹介します。

藤田嗣治は、東京美術学校を卒業後、1913 年に渡仏。白い下地に細い線描で描いた裸婦像が 1920 年代に人気を博し、一躍有名になりました。ピカソやモディリアーニ、スーチンらと交友があったことでも知られ、《風景》(1918 年) は、モディリアーニやスーチンらとともに第一次世界大戦の戦禍を避けて南仏・カーニュに旅行した際に描かれた作品です。

その藤田を生涯にわたって慕ったのが、海老原喜之助です。藤田より 18 歳年少の海老原は、1923 年に渡仏するとすぐに藤田を訪ね、助言や指導を受けました。海老原は 1924 年にサロン・ドートンヌに初入選し、1920 年代後半には、「海老原ブルー」と呼ばれる、青と白を基調とした雪景色のシリーズを描くようになりました。

岡鹿之助も、藤田を敬愛し師事した一人です。1924 年に渡仏し、翌年にはサロン・ドートンヌに初入選。新印象派を研究し、独自の点描表現を確立しました。《魚》(1927 年) は、海釣りが好きだった岡らしい題材を、軽やかな点描で構成した静物画です。

名古屋生まれの佐分真と伊藤廉は、東京美術学校卒業後、同じ 1927 年に渡仏しています。佐分もパリでは藤田を頼りにし、また、今期の「コレクション解析学」で紹介する鬼頭甕二郎 (1923 ~28 年渡仏) とも手紙のやりとりをしていたことが分かっています。伊藤廉は、フランスで約 3 年間学んだのち、1930 年に帰国し、同年中に発足した独立美術協会の創立会員として活躍したことでも知られています。

大垣生まれの矢橋六郎は、東京美術学校卒業後、1930 年に渡仏し、約 3 年間をフランスに過ごしました。留学中はノルマンディイ、ブルターニュなどを精力的に旅行して回ったと言います。《サンポール 2 (南仏)》(1932 年) は、シャガールも晩年を過ごした南仏のサン=ポール=ド=ヴанс (Saint-Paul-de-Vence) と呼ばれる街を描いたものと考えられます。崖の上にそびえ立つような集落を、南仏の強い日差しを感じさせる色彩で鮮やかに描いています。

現代の美術 月日をともに歩む

新しい一年が始まりました。カレンダーを新調した方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。ひと口にカレンダーと言っても日めくり、週めくり、月めくり、一枚もの、壁掛け、卓上など形式や大きさもさまざま、買い替えが必要ないものを使っている人、スマートフォンで済ませる人、全く使わない人もいるかもしれません。

名古屋市美術館は、2005 年度から当館協力会カレンダーの制作に協力してきました。東海地方にゆかりの深いアーティストや、展覧会活動を通して当館との関わりができるアーティストなど、毎年異なる方が作成し、他では手に入れることのできない貴重なものとなっています。

今回の展示では、山本富章による第 1 作目 (2006 年) から横野明日香による第 20 作目 (2025 年) まで、20 年分のカレンダーと各作家の厚意により寄贈いただいた原画をあわせて紹介します (一部、原画のないものもあります)。

一枚もののカレンダー制作には 365 日分の日にちを入れる以外に、所定の額に入る決められたサイズと厚みである、新年を迎える前に届けられるよう納期を守る、などの制約があります。また版画作品のルールに倣い、一枚一枚にサインとエディション (印刷の場合、通し番号／限定総数、の形で表記) を作家が必ず手書きで入れています。

それだけでも大変な労力ですが、制約がある中でどうオリジナリティを持たせ、どのような題材にするか。日にちの表記にどの書体を選び、文字の大きさはどのぐらいで、用紙のどこに、何色で、どのように配置するか。依頼を受けた作家が自身の裁量で決められる反面、正解はありません。受け取る人はどんな気持ちになるか、どこに飾るだろう、どんな一年を過ごすだろう…カレンダーを通して、ともに歩む一年という月日に想像力を働かせた試行錯誤と創意工夫が、それぞれの作品に表れていると見ることもできるでしょう。これまでご協力いただいた作家の皆さんに改めて感謝するとともに、展示をご覧いただく皆さんにそれぞれのカレンダーの良さを発見し、楽しんでいただければ幸いです。

年の初めを意識して、2012 年のカレンダーを制作した日本画家・平松礼二の屏風作品を収蔵後、初めて展示します。すべての人が心身ともに健やかに過ごせる一年ありますように。本年も、名古屋市美術館をよろしくお願いいたします。

メキシコ・ルネサンス 壁画・下絵・記録

メキシコで長く絵画制作や美術教育にたずさわり、帰国後、瀬戸や名古屋で活動した画家・北川民次を起点として、名古屋市美術館では、メキシコ・ルネサンスと呼ばれる 20 世紀前半のメキシコ近代美術の貴重な作品を収集しています。

スペインからの独立後も続いた独裁体制により、民族の誇りや希望を失いかけていたメキシコの民衆に向けて、マヤ文明やアステカ文明などに代表される自国の歴史や神話、20 世紀初頭の革命の現実とこれから見るべき未来を、公共建築物の壁に描く美術運動が展開されました。なかでもホセ・クレメンテ・オロスコ、ディエゴ・リベラ、ダビッド・アルファロ・シケイロスは壁画運動の三巨匠と呼ばれ、広く知られています。

壁画の特性として、輸送が可能な絵画とはちがい、基本的には現地でしか見ることができません。どのような内容が描かれたのかを人々に広めるため、安価で大量に複製できる版画が用いられました。リベラによる《大地の果実》や《夢》は、1932 年に 5 点組で出版されたリトグラフ集からの作品です。1923 年から 28 年にかけて制作したメキシコ文部省の壁画から題材を取り、一部を拡大したり版画のために構成を変えたりしています。リベラは自身が手掛けたなかで最大の壁画である、この作品の撮影を写真家のモドッティに依頼しました。雑誌『メキシカン・フォークウェイズ』にその写真とクレジットが掲載されると、彼女は記録写真家としても知られるようになります。《エミリアーノ・サパタ》も同じリトグラフ集からの作品ですが、こちらは 1930 年に完成したクエルナバカのコルテス宮殿の壁画をもとに、ニューヨーク近代美術館での個展のために描いた白黒のフレスコ・パネル壁画から取られたものです。

また壁画は、依頼主や建物の所有者など関係者の都合により、計画途中で頓挫して実現に至らないこともあります。《赤軍の行進》はリベラがロシアで依頼されたものの、実現しなかった壁画のために描いた習作と考えられています。《独立 1818 年》は、シケイロスが南米チリの都市チリヤンにあるメキシコ学院に制作した壁画《侵略者に死を》の全図下絵ですが、壁画自体は地震で崩壊してしまい、現在は記録写真でしか見ることができません。下絵は画家の構想を知る貴重な情報源であるとともに、実現しなかった壁画の計画や現存しない壁画の内容を今に伝える重要な記録でもあるのです。

郷土の美術 なごやのうつりかわり（博物館連携事業）

小学校 3 年生の社会科に「市の様子の移り変わり」という単元があります。衣・食・住をはじめとする私たちの暮らしが、明治時代から現在までどのように変化したかを学ぶものです。名古屋市の子どもたちは、市域が広がっていく過程や交通の発展などを詳しく学びます。

瑞穂区桜山にある名古屋市博物館は、展示だけでなく実資料に触れる体験事業を通じて、児童たちに学習機会を提供してきました。博物館のリニューアルによる工事休館にともない、令和 6 (2024) 年度および令和 7 (2025) 年度の 2 年間は美術館の展示室を利用し、2 館が連携して事業を行うこととなりました。名古屋市美術館の所蔵作品から、名古屋のまちの変化やそこで暮らす人々の様子を見て取れる絵画や写真を選んで紹介します。

《暮れ行く堀川》と《納屋橋風景》は、どちらも堀川にかかる納屋橋を描いた昭和初期の作品です。近代的な建築が増えつつあった広小路通沿いの景色を西村千太郎がほぼ忠実に描いたのに対し、喜多村麦子の作品には、荷物を上流へ運ぶ船（はしけ）があちこちに浮かび、川べりには古い倉庫が立ち並んでいます。堀川が名古屋の物流の要だった江戸時代の名残を懐かしむかのようです。納屋橋は当館から歩いて 10 分ほどですので、現在の様子と見比べてみるのも面白いかもしれません。

鶴舞公園は、1909 年に設置された名古屋市立の公園第一号です。《虎の檻》は、かつて上前津付近（のちに大須門前町）で動植物苑を開設していた個人から多くの動物を譲り受け、1918 年に開園した鶴舞公園付属動物園の様子を伝えています。その後、飼育施設が手狭になり、より広い土地を求めて移転したのが現在の東山動植物園です。市野長之介の《公園の池（鶴舞公園胡蝶ヶ池）》に描かれた池は現存しますが、遠景に見える建物・聞天閣は戦中に解体され、今はその姿を見ることはできません。

船橋治彦の《[台所]》と鬼頭鍋三郎の《裁縫》は、女性が家庭にいそしむ様子を題材にしています。当時、出来合いの料理や服を提供する店は今よりずっと少なく、あらゆるもの在家で手作りしました。ご飯を炊くこと一つとっても、薪を割る、火をおこす、かまどの前で火加減を見続ける、など労力と時間がかかりました。足踏みミシンは 1930 年代に入ると国内でも製造が始まりますが、一般家庭に広く普及するのは戦後になってからです。

臼井薫の写真には、戦後の復興期にあたる昭和 22 年から 32 年ごろの名古屋および周辺地域に暮らす人々が写し出されています。身に附いている物や生活空間、周りの風景、娯楽に集まる様子などから当時の暮らしぶりを想像し、令和の生活との違いを考えながらご覧ください。

コレクション解析学 鬼頭甕二郎《モラン河畔》1926年

令和6年度、名古屋市美術館は鬼頭甕二郎（1897-1952）の油彩画3点をご寄贈いただきました。1点は長年にわたって受託していた作品を受贈することが叶い、2点は親族から連絡をいただいたことで、受贈に至ったものです。鬼頭の作品は、戦火でその大部分が焼失したため、残された作品点数が極めて少ないと考えられ、調査研究が難しい状況が続いていました。しかしながら、作品を所蔵する親族から情報をいただいたことで、調査研究の状況は一気に進展。直系の親族の元に、多くの作品が大切に保管されていることが分かりました。その後、作品調査を経て、当館に計3点の鬼頭作品を新たに迎えることができました。今回のコレクション解析学では、《モラン河畔》（1926年）を中心に、新たに収藏した作品についてご紹介します。

名古屋に生まれた鬼頭甕二郎は、市立名古屋商業学校を卒業後に上京し、日本美術院研究部および本郷洋画研究所で美術を学びます。1923年にフランスに渡り、約5年間の留学を経て、1928年に帰国。1935年頃から名古屋を拠点に個展を開催し、画業を続けました。フランス留学時の行動詳細は不明ですが、本人や友人によるエッセイ、出品目録などを参考することで、訪問した土地を確認することができます。1923年にはオーヴェール＝シュル＝オワーズにアルル、翌年にはオニー、ブザンソン、オルナンなど、フランス国内を精力的に旅行して回っています。帰国後、1929年に開催した「鬼頭甕二郎 滞佛油繪展覽會目録」（於：名古屋松坂屋）を見ると、出品作品のほとんどが旅先での制作であることが分かります。《モラン河畔》は、フランス中北部セーヌ＝エ＝マルヌ県クイイ（Couilly）の風景であり、その地域を流れるグラン・モラン（Grand Morin）河畔を描いています。水面に映る河畔の家々が、繊細な緑の濃淡で表現されています。絵具の欠損やニス汚れなどが目立っていたため、今年度に修復を行い、美しい色彩がよみがえりました。

コレクション解析学では、この《モラン河畔》を中心に、鬼頭甕二郎についての最新の調査研究の内容を紹介する予定です。

コレクション解析学 2025

当館のコレクションから1点を選び、その魅力を学芸員が紹介する美術講座です。

日時：2026年1月31日（土）14:00-（約90分）

作品：鬼頭甕二郎《モラン河畔》1926年

演題：「鬼頭甕二郎の新収蔵作品」

講師：森本陽香（当館学芸員）

会場：当館2階講堂（定員180名、先着順、入場無料）

名古屋市美術館  Nagoya City Art Museum
名古屋市中区栄二丁目17番25号（芸術と科学の杜 白川公園内）
TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005
<http://art-museum.city.nagoya.jp/>